

2. 府中市の現状と課題

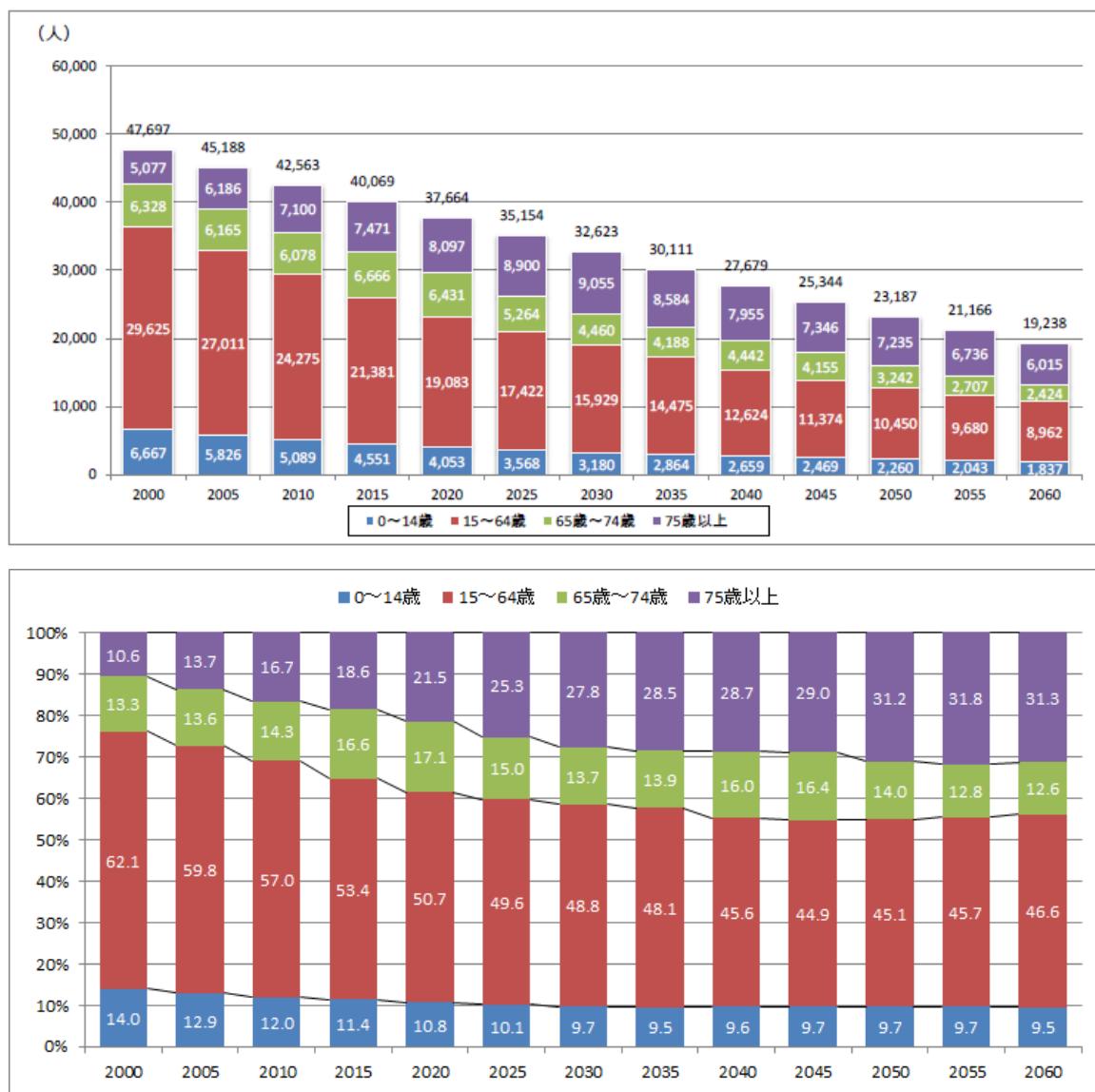
(1) 人口

①総人口の動向

◇平成 27（2015）年に 40,069 人であった府中市の人口は、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、令和 27（2045）年に 25,344 人（14,725 人減）になるとされています。

◇次に人口構造からみると、生産年齢人口（15 歳から 64 歳まで）の減少が顕著となっており、労働力が不足することが現実のものとして突き付けられています。一方で、老年人口（65 歳以上）は増加しており、令和 2（2020）年にピークを迎え、団塊の世代の高齢化に伴い、特に、令和 7（2025）年は 75 歳以上の人口の割合が増えることが予測されています。

【年齢 4 区分人口の推移】



【資料】総務省「国勢調査」、推計値は国立社会保障・人口問題研究所による推計人口

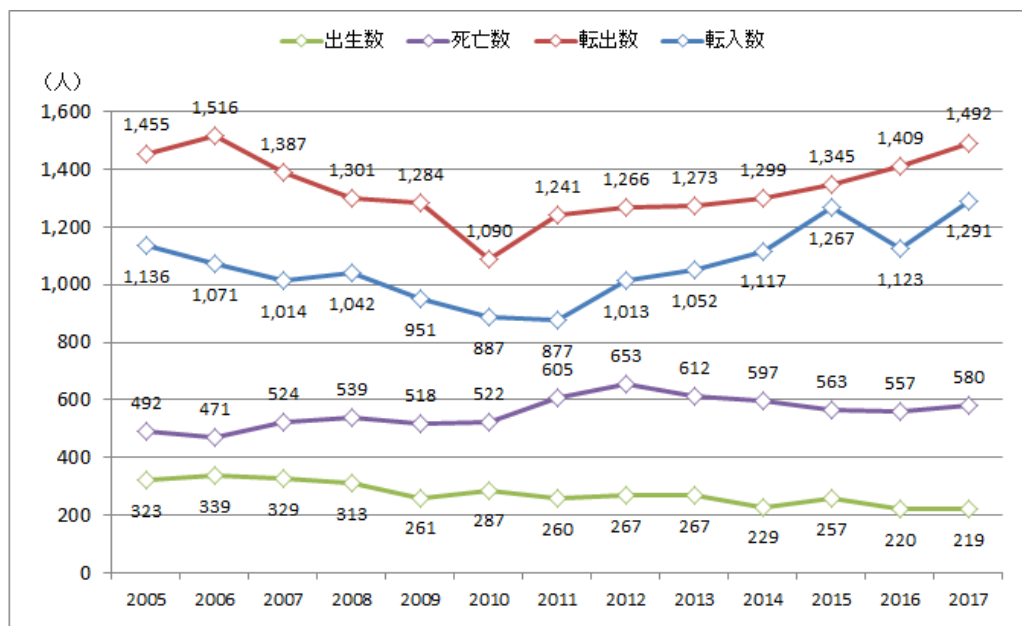
②出生・死亡数、転入・転出数の推移

◇自然増減は、老年人口の増加に伴い、死亡数が出生数を上回る自然減が続いています。

◇社会増減については、転出超過による社会減が続いていますが、直近では転入数が増加しており、転出超過数は少なくなっています。

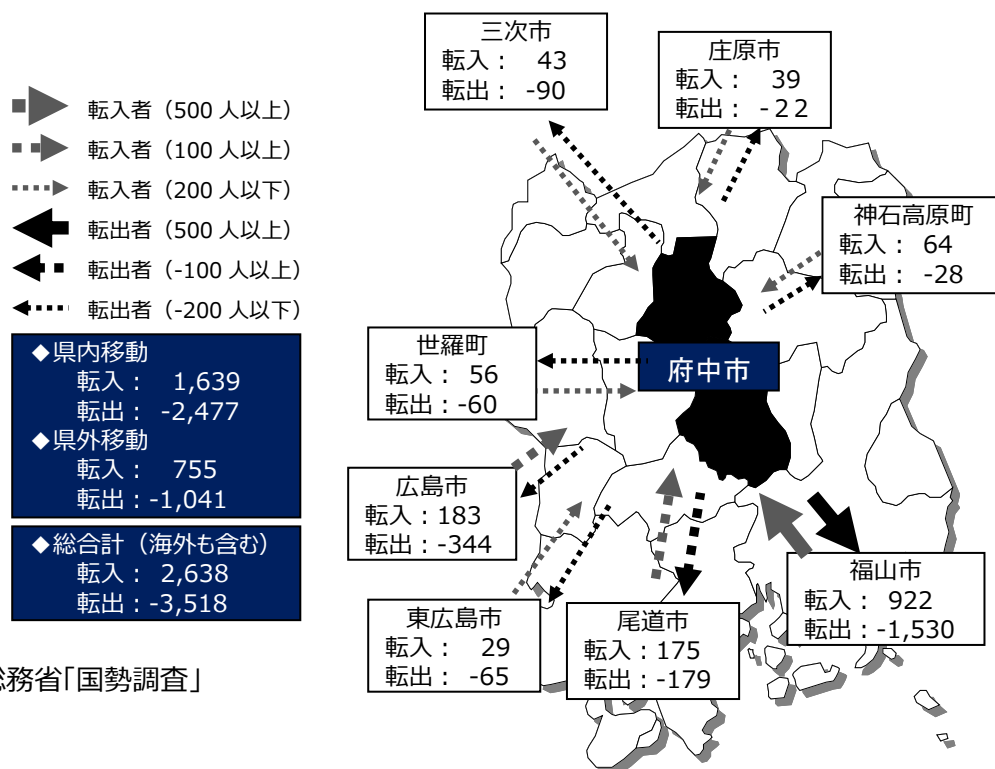
◇転出・転入先では、平成 22（2010）年から平成 27（2015）年にかけての 5 年間の転出・転入先をみると、転入、転出先ともに隣接する福山市が最も多くなっています。

【出生・死亡数、転入・転出数の推移】



【資料】総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査」

【周辺自治体との人口移動の状況（2010 年から 2015 年にかけての 5 年間の主な転入・転出先）】



【資料】総務省「国勢調査」

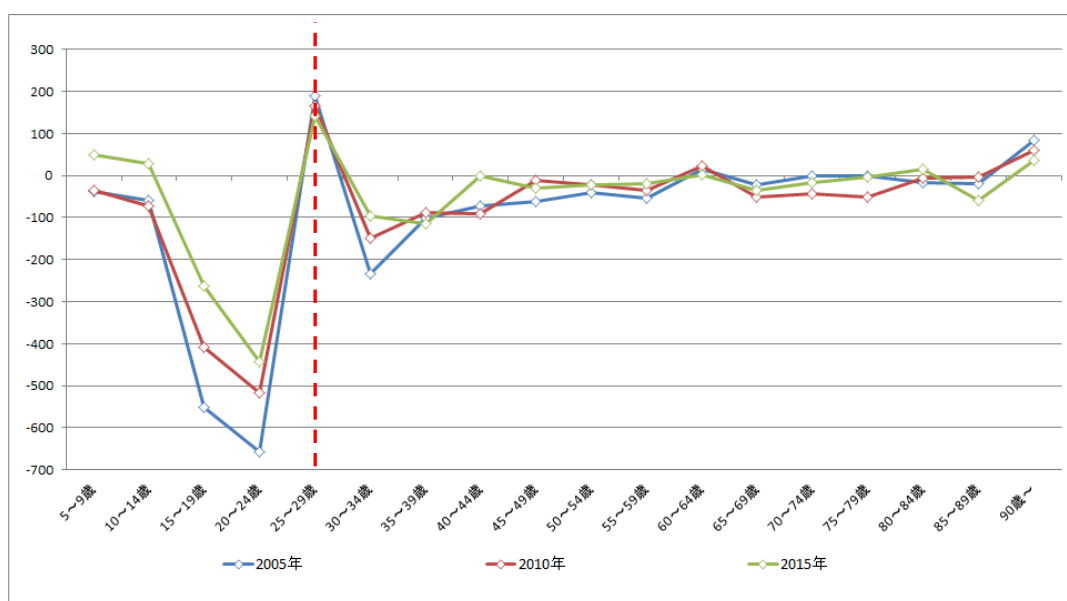
③年齢階級別の人口移動の長期推移

◇府中市の年齢階級別の人口移動（純移動）を長期動向でみると、「15～19 歳」「20～24 歳」の転出超過数は減少傾向にはありますが、依然として転出超過の傾向は顕著で、若い世代の進学に伴う転出の影響などが考えられます。一方、「25～29 歳」が転入超過となっており、若い世代の就業等による転入が影響しているものと考えられます。

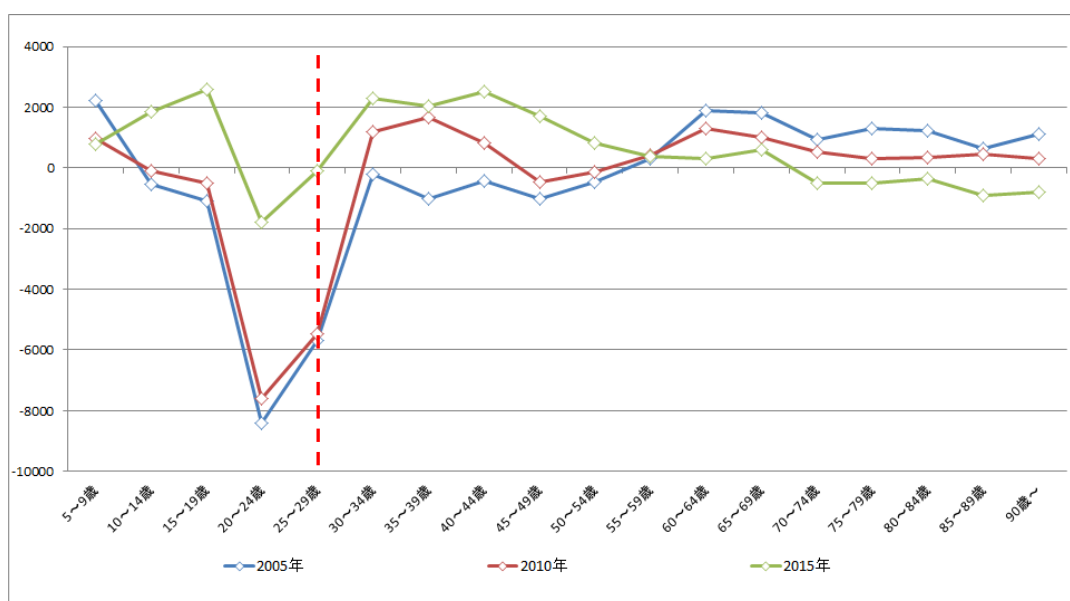
◇府中市と広島県全体とを比較すると、府中市は「25～29 歳」で県全体よりも転入超過が高い値となっており、若い世代の就業地としてのポテンシャルが県内でも高いことが認められます。

◇一方、「30～34 歳」以降の若年層では県全体では近年転入超過の傾向あるものの、府中市では転出超過が続いており、当該若者の定着を促進する施策が必要となっています。

■ 府中市の年齢階級別人口移動の推移



■ 広島県の年齢階級別人口移動の推移



【資料】総務省「国勢調査」

【表の見方】

ここで示している 5 歳階級別年齢層の人口移動（純移動）は、国勢調査による市内と市外の人口移動の差し引きが 5 年後に何人であったかを示しています（死亡した人数は「都道府県別生命表」を用い調整済み）。

例えば、図の「25～29 歳」については、「5 年前には市外にいたが調査時点で府中市にいる人」（転入してきた人）から「5 年前には府中市にいたが調査時点で市外にいる人」（転出した人）を引いた人数がプラスの数値となっており、「転入超過だった」ということを示しています。

④外国人人口の推移

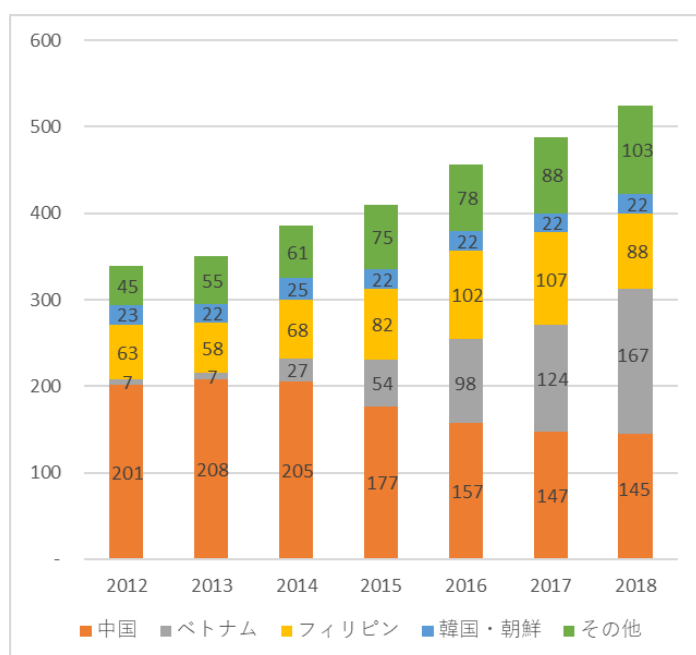
◇平成 30（2018）年における府中市内の在留外国人が 525 人となっており、周辺圏域と同様に年々増加しています。国籍別にみると平成 24（2012）年から平成 29（2017）年までの間は中国からの在留者が最多でしたが、2018 年はベトナムからの在留者が最も多くなっています。

◇外国人人口の増加に伴う受入環境の整備を柔軟に進める必要があります。

【外国人人口の推移】

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
府中市	339	350	386	410	457	488	525
福山市	6,381	6,405	6,637	7,409	8,020	8,765	9,363
尾道市	1,657	1,565	1,723	2,103	2,483	2,513	2,714
三原市	1,364	1,423	1,573	1,803	1,988	1,996	2,100
三次市	453	466	464	492	517	541	629
庄原市	293	278	338	326	363	374	394

（出典：法務省 在留外国人統計）

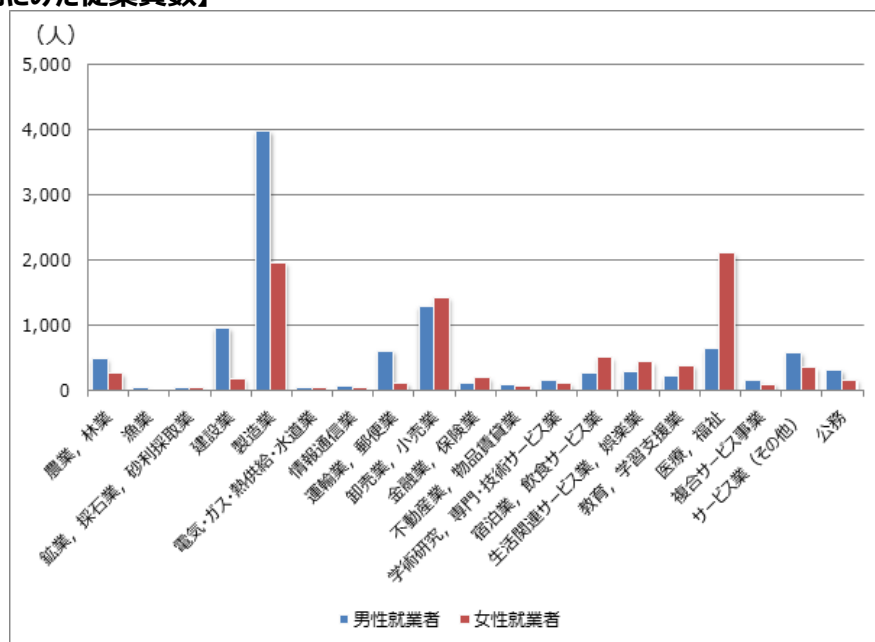


(2) 産業

①産業別にみた従業員数

- ◇産業別では製造業が突出して高く、それ以外で男女とも 1,000 人を越えたのは卸売・小売業のみです。女性は、医療・福祉が 2,000 人を越え、製造業、卸売・小売業が多くなっています。
- ◇古くからものづくり産業のまちとして発展してきた府中市は製造業に特化した産業構造となっていますが、生産年齢人口減少に伴う人材不足やリーマンショック以降の景気後退により、企業数が減少を続けており、販路開拓や新産業の創出といった新たな産業活性化策が必要となっています。

【産業別にみた従業員数】

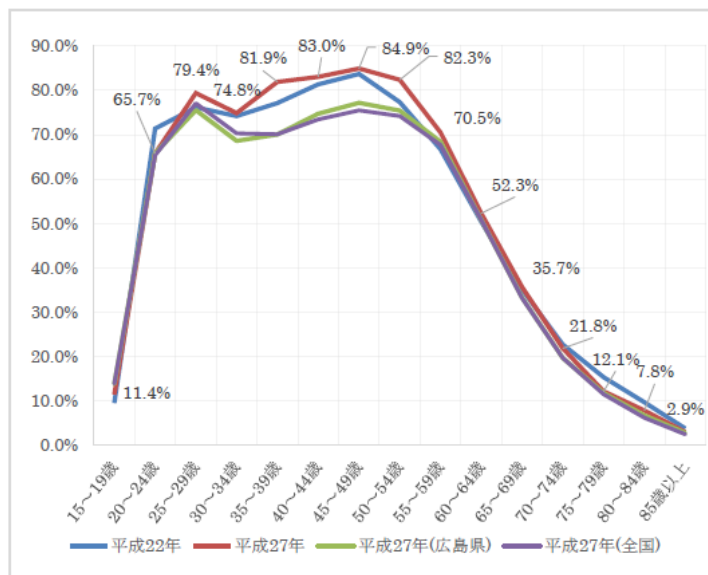


②女性の労働力

◇女性の就業率は、25 歳から 74 歳までの就業率が上昇しており、全国的にみられる「M字カーブ（結婚・出産期の就業率の低下）」が緩やかな傾向となっています。

◇こうした働く女性が多いまちの特性をふまえ、働きながら子育てのできる環境整備等の支援策が必要となっています。

【女性の就業率（広島県・全国との比較）】

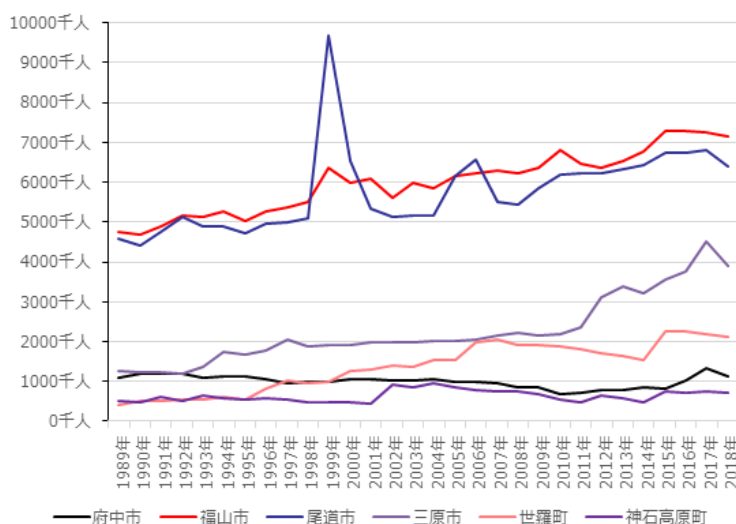


③観光振興

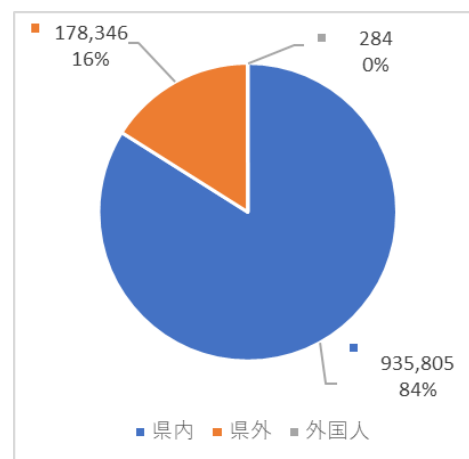
◇府中市を訪れる観光客数は、短期的には道の駅の開業等による増加や、平成 30 年 7 月豪雨災害に伴う一時的な減少もありますが、長期的な傾向を見れば 100 万人前後での推移となっています。

◇府中市を訪れる観光客は、府中市内を含め県内からの人が 8 割以上を占めており、広島県全体と比べ、県外客の割合が低く、特に、府中市を訪れる外国人観光客は 1 千人未満と府中市の総観光客全体の 1%にも満たず、近年急増しているインバウンド需要を取り込む施策、魅力づくりが急務となっています。

【府中市及び備後圏域観光客数の推移】



【観光客の発地別内訳（2018 年度）】

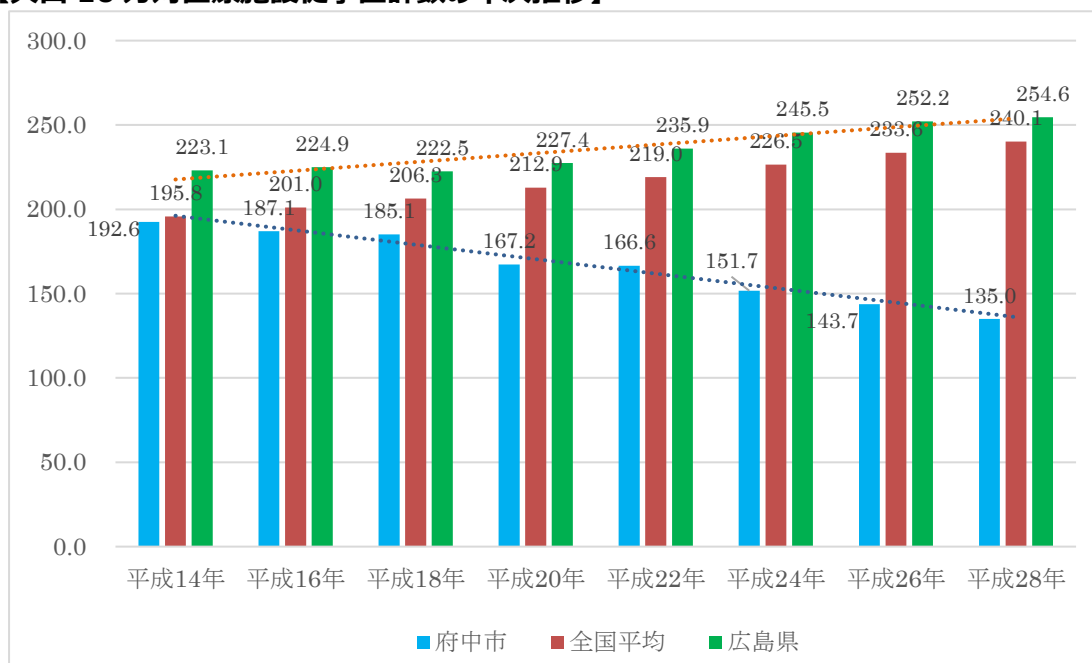


(3) 地域医療

①地域医療の現状

- ◇府中市の医師数は、減少が続いており、人口 10 万人当たりの医療施設従事医師数は、平成 14 (2002) 年では広島県平均と本市との差は 30 人程度であったものが、平成 28 (2016) 年には約 120 人にまで拡大するなど医師不足が深刻化しています。
- ◇府中市病院機構の勤務医数の減少、開業医の高齢化と後継者不足、無医地区等の増加といった地域医療体制上の課題を抱えており、医療サービスの提供を維持するための施策が必要となっています。

【人口 10 万対医療施設従事医師数の年次推移】

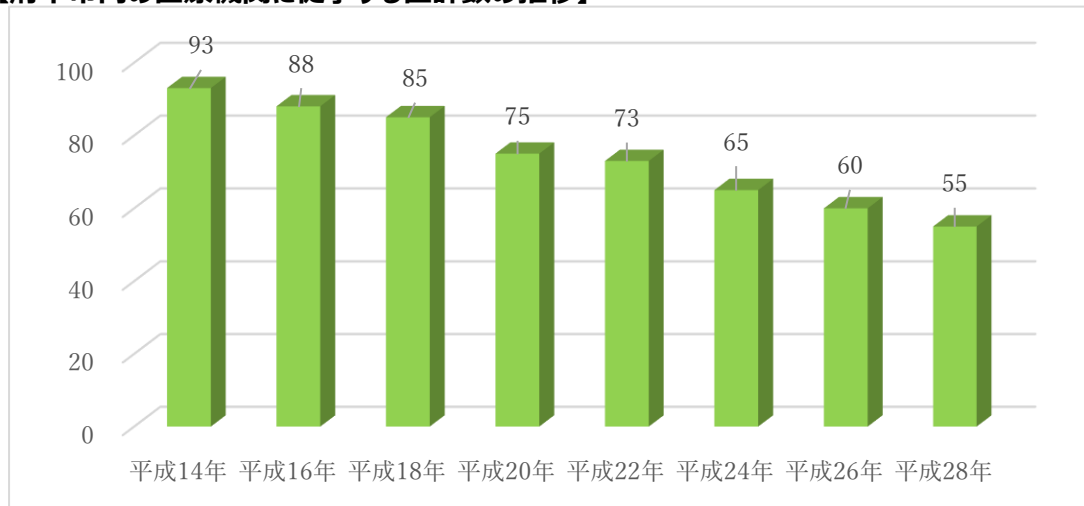


「医師・歯科医師・薬剤師調査」(厚生労働省)

※府中市の数は、基準日現在の住民基本台帳人口から算出。

注) 平成 14 年の数値は、府中市と甲奴郡上下町の合計から算出

【府中市内の医療機関に従事する医師数の推移】



「医師・歯科医師・薬剤師調査」(厚生労働省) から

注) 平成 14 年は府中市と甲奴郡上下町の合計

3. 府中市の特性(強み)

(1) 歴史に裏打ちされ、時代の面影が折り重なっているまち

大化の改新後の7世紀後半から8世紀前半にかけて、都と北部九州を結ぶ古代山陽道が整備され、府中市には備後国（現在の広島県東部）を統括する行政府「国府」が府中市街地に置られました。備後国府は奈良時代から平安時代末までの約500年間にわたって備後地域初の地方都市として機能し、政治・経済・文化の中心地として栄えました。その後の中世以降も人や物の集積地としての歴史を重ね、明治時代以降、工業化や世界的な需要の高まりにより各種産業が花開き、現在の中心市街地が発展していきました。こうした古代山陽道や国府由来の地割が今に息づき、明治以降の近代産業が発展する過程で築かれてきた、職と住が近接した町並みや、当時をしのぶ建物は、初めて訪れる人もどこか懐かしいと感じるレトロな雰囲気演出しています。

上下地域では、江戸時代に代官所が置かれ、幕府直轄地として繁栄し、また、山陰地方と山陽地方をつなぐ石州街道を通じ、周辺地域の特産物の集散地として賑わった商業のまち、豪商のまちとしての当時の風情が、“白壁の町並み”として今も残されています。

本市には、国府と天領という2つの本物の歴史の裏打ちがあり、近世から明治・大正・昭和の時代の移ろいを感じさせる佇まい、さらには古いだけでなく現代・未来につながる産業の息吹を体感できるという、他の都市にはない独自の個性を持っています。

(2) 産業が集積する「ものづくり都市」

本市では、江戸時代の頃から「藍」、「桐」、「こんにやく」、「煙草」などの農林産物の集積地として商業が盛んになりました。それに伴って集散物を加工する機能が要求され、明治時代から大正時代の近代化を転機に、「繊維」、「木工」、「食品」などの工業が盛んになり、人情味豊かな中に進取の気性を持った人々の努力によって、家内工業から重化学工業へと多彩な産業が発展してきました。

そうして、技術と精神が脈々と受け継がれ発展してきた本市には、府中家具、府中味噌などの伝統産業から、国内をリードする繊維産業、非鉄金属ダイカスト製品、旋盤用チャック、ラジコンヘリコプター、ラバータイル、テルペン化学などグローバルに活躍する先進技術を駆使した製造業まで、各分野の第一線で活躍する多数の企業があります。その事業規模も、大規模生産から匠の技が生きる中小零細企業まで多様性に富んでいます。また、令和元（2019）年時点で創業100年を超える企業が61社あり、これは広島県全体の100年企業のうち約7.1%にもなります。県内の人口規模で約1.4%に過ぎない本市が、これだけ多くの100年企業を有することは、本市産業の歴史の深さとポテンシャルの高さを物語る一つの事実として表れています。その一方で、新たな産業分野へ挑戦する起業家も数多く輩出しています。

本市は、人口4万人程度の小都市ですが、ものづくりの長い歴史と匠の気概、世界に通ずる高い技術力を持った様々な業種業態が集積するなど、他の新興工業地帯・工場だけのものづくりとは異なる、「本物のものづくり都市」だと言えます。

（３）子育て・教育のまち

府中市では、市内に縫製や木工といったものづくりの事業所が多くありました。女性がそういった事業所に勤めたり、勤めていない女性も家庭内で内職作業を請けたりという社会で、女性が働くということは特別ではないという意識が根付いています。

家庭内の内職は減ってきましたが、そんな母親をみて育った子供たちが大人になり、就職や子育てを考えたときに、親世代が男女ともに仕事と家庭の両立を考え、祖父母世代や地域が支えようと考える風土が培われています。そういった風土からくるニーズに合わせ、行政も民間も早くから保育環境の充実を図ってきました。

市内保育所では待機児童ゼロの実績を続けており、子供と子育て世代を支援する児童館「府中市こどもの国」の設置や、中学校・義務教育学校卒業までの医療費の助成制度、妊娠から出産、子育てまでを切れ目なく支援する体制の整備等の施策と合わせ、現在では働く女性だけでなく、子育て世代全体に優しい環境が整っており、まさに「働きながら子育てが叶うまち」となっています。

また、教育の分野においても、平成 16（2004）年から小中一貫教育を導入し、平成 29（2017）年には中四国地方で初となる「義務教育学校」と「併設型小中学校」に市内全校が移行し、「中一ギャップ」の解消や新教科の創立など先駆的な教育活動が展開できるようになっています。

また、市内全 10 校にコミュニティ・スクールを導入し、地域住民が学校運営に参画する取組を行っています。地域人材や地元企業とともに子供たちの育成にあたっており、今では親よりも子供の方が地域や地元企業に詳しくなり、積極的に地域課題の解決に取り組むなどの事例も生まれています。令和元（2019）年には、「全国コミュニティ・スクール研究大会」を本市で開催し、本市の先進的な取組が全国に認知され、高い注目を集めています。

市内には、高い技術力を持ちグローバル展開する企業が幾つもあります。通学途中に見る工場の門扉の向こうは世界と繋がっていることを 9 年間の教育課程に連結させることで、府中市を「生きる場所」「住む場所」「帰る場所」に選び、この地で幸せを築こうとする企業家や若者たちの挑戦を、義務教育時代の「原風景・原体験」に形成できるのも小中一貫教育制度とコミュニティ・スクールが開く可能性です。

地方都市が一貫した理念のもとに「人材の育成」から「人格の完成」を目指し、府中市では小中一貫教育を中心に、幼保小連携、中高連携、さらには地元産業界連携までも包み込む「府中教育 Unified・City（ユニファイドシティ）」構想を打ち立て、市民とともに、Society5.0 時代を見据えた新たな「まちづくり・人づくり」の夢を描きはじめています。

市内のすべての小中学校で一貫教育を展開していることに加え、地域・企業と一体となったコミュニティ・スクールの仕組みづくりと実践を行っていることは、全国的にみても高い先進性とひとつづくりの実績として評価されており、小中一貫教育を基軸とした「幼保小連携」「中高連携」にも取り組むなど、常にトップランナーとしての進化を続けています。

（４）近接性、多様性のあるまち

本市では、都市的要素が揃う市街地から、わずかに移動するだけで豊かな自然環境に出会えます。市街地を歩けば、時代の面影が残るまちの風情を感じながら、買い物、医療、行政などといった生活に必要なサービスも受けることができます。その一方で、川辺や山々などの豊かな自然や地域の皆さんによって維持された田園風景は、心休まる空間であるだけでなく、水源の涵養（かんよう）や景観の保全といった様々な恩恵を我々にもたらしています。

また、本市はその立地から、中核市、観光都市、山や海、空港・新幹線駅へも１時間圏内という特徴があります。このことは、市民が仕事やショッピング、レジャーをするにも、企業が経済活動を行うにあたってもちょうどいい距離にあるといえます。また、市外在住者にとっても、本市との関係を構築する際、車や電車、バス、航空機等どのような手段でも容易に訪れることができるちょうどいい場所にあるといえます。

仕事や暮らし、働き方などに対する価値観が多様化し、ICT 化が進展する現代においては、都市と自然の近接性・多様性があるという特徴は、府中市で暮らすことで時間的なゆとりや自然環境の豊かさを享受しつつ、ビジネス活動においても、市外や大都市ともつながっていくことが可能になるという大きな強みとして、本市が持つ地理的優位性だと言えます。

都会じゃないけど田舎でもない。住むにも、働くにも、遊ぶにも“ちょうどいいまち”、それが府中市です。

（５）やさしさがあふれ“いこる”熱量が高いまち

本市は、市民同士がふれあう、人情豊かな地域社会があり、また、“いこる”人材が活発に活動する市民活動の盛んなまちです。

各地区では、町内会や地区社会福祉協議会といった地域に密着した団体が設立され、それぞれの地域でコミュニティ活動のほか、スポーツや文化活動、郷土芸能の継承など、地域住民の交流を促進する取組が積極的に行われています。また、医師会、歯科医師会など市民の医療保健活動への積極的な協力や市内企業の社会貢献活動など、様々な団体や企業がともに市民の健康づくりやまちづくりに積極的に関わっています。

NPO やまちづくり団体は、それぞれが持つ知識や技術を結集し、また、市外からの力も取り入れ、府中市ファンを増やししながら、新たなイベントを開催したり、事業を充実・発展させたりするなど、本市に賑わいと魅力を生み出す活動を盛んに行っています。

人口減少に伴い地域のコミュニティ機能やまちの活力の低下が懸念されている中、こうした市民同士が繋がり支え合うことや、“いこる”人材が存在することは、今後起こりうる様々な地域課題の解決に向けて、市民自らが協力して取り組んでいくことができる府中市が持つ強力な地域力です。

“いこる”とは、備後地方の方言で「炭に火が熾（おこ）り赤々と燃えている状態」の意。“いこった”炭は、やすやすとは消えず、また、周りの炭も“いこらせて”いくことから、本計画では、まちづくりの灯（ひ）を起こすことや起こす人、そうした人たちの熱量にあてられてまちづくりの灯が次々と広がっていく様を表す意味で使用しています。

